

猫の恩返し

「おはよう、みーこ」

朝起きて、枕元で眠るみーこに呼びかける。

まだ眠っているみーこの美しい毛並みをなでなでして、口元にキスをする。ん？ ん？
もう一回キスをする……。ん？ ん？ ん？ なにか変な匂いしない？ え、みーこお漏らし？
まさかまさか。すんすんすんすん。みーこを起こさないように私は、ベッド周辺をかきまわった。私の異変に気づいたのか、みーこは愛らしい目をパチクリと開けてしまった。

「あーん、みーちゃんごめんね、起こしちゃったねえ」

まだ夢うつつのみーこを腕の中に入れて、喉元をさわさわした。みーこが三角形に大きく口を開いてあくびする。

くさっ！ くさっ！ え、何？ みーこどうしちゃった。私は鼻を押さえてもう一回みーこの口元に顔を近づける。うげー。鼻を押さえていても臭い。どういうことだ。昨日のご飯が歯に挟まっていたりするのだろうか。いや、もっと大変な内臓の病気かもしれないな

い。愛しい恋しいみーこ、あなたは どうしてそんなに臭いの。

私はみーこを抱きしめるふりをして必死に口の中のをのぞいた。大丈夫だ。鋭い牙は健在だ。私はこの四本の牙を見る度に、ああ、こやつらはトラやライオン様と同じ先祖を持つのだなと、野に解き放つてやりたい衝動にかられるのだ。そんなことしても、箱入りみーこは生きていけないとわかつているが、野性の魂を私が握っていて果たして良いのだろうか、という葛藤はいつも心のどこかにある。用意されたトイレ、袋に入った食べ物、首につけられた鈴、トラの子孫ならば大草原を思いっきり走ってみたかろう。その牙を、首筋にがぶりと立ててみたかろう。いや、ライオンやトラがネコ科なのだからネコの方が始祖ということになるのか。

そんなことはどうでもいい。とにかく動物病院へ連れて行こう。パジャマを脱ぎ飛ばすと、朝ごはんを食べ終えたみーこを籠に入れ、食パンの耳をくわえて最寄り駅へと急ぐ。本当はタクシーに飛び乗りたいところだが、もうすぐ家賃の引き落としがあるので我慢してもらおう。籠に入れられたみーこは、ニャーニャーと泣いて脱出しようとして必死だ。私は籠につけられた小窓を開けて

「みーちゃん、三十分の辛抱だからね。ごめんね」

と声をかける。今日は幸いにも午前中に予定された撮影がリスケになり空いていた。私達についてるよみーちゃん。きつと、きつとすぐに良くなるよ。逸はやる気持ちを抑えて、電車

を乗り継ぎ掛かりつけの病院へと急いだ。

「はーん。虫歯ですわねー。奥歯が二本、結構ひどいねえ」

おでこにつけたライトを消すと先生は、よく頑張ったねとみーこを撫でた。

「良かった、ただの虫歯なんですわね」

大きな内臓の病気でないことに胸をなでおろした。

「みーこちゃんは、今年で、じゅうにー……」

「十三歳です」

「そうだよわね、もう結構なお年だから、虫歯になるっていうのはよくあることです。心配はいらないよ」

先生はみーこを抱っこして、語りかけるように喋った。そして一呼吸置いて今度は私の目を見て言った。

「でも、抜くしかないんだよわねえ。放っておいたら菌が体に入ってしまったって死ぬことだってある。それに猫だつて虫歯は痛い。だから辛くなる前にね」

「え、でも奥歯二本も抜いたらごはんが食べられないですよ」

「それがね、臼歯ってネコにはほぼ必要ないの。この四本の牙で食べてるんだよ。だから抜いても問題ないの」

「へー！ そうなんですか。牙つてやつぱ役に立ってるんですねー」

「そりゃそうだよー。肉食動物なんだから。ねえ？」

先生はみーこの顔を覗き込むと、にこりと微笑んだ。しかしここからが本題だった。みーを下ろすと先生は椅子に座りさつきまでとはちがう表情で続けた。

「でね、抜くのは全身麻酔になるのね」

「全身麻酔……大丈夫なんでしょうか？」

「みーちゃんはしっかり体重もあるし大丈夫だと思っただけ、万が一がないとは限らないんですね。承諾書に説明が書いてあるので、よく読んでサインしてもらってからになります」

「はあ……」

確かに親知らずを抜く時、私もこういう〈何かあっても文句を言いません〉みたいなことが書いてある紙にサインさせられたな。自分のことなら平気だけど、麻酔をしたままみーが起きてこなかったらどうしよう。考えただけで血の気が引いていく。

「それで、この子はペット保険には入ってなかったかな？」

「は、入ってないんですね……」

さらに別のドキドキが襲ってきた。いつも良くしてくれる赤ひげ先生だが、こればかりは半額になんかしてくれないだろう。

「手術の費用が、十万円かかっちゃうんだよねえ」

「え！　じゅうまんえん?!」

「そう……ちよつとねえ。かかっちゃうんですねえ」

私の驚きようが下品だったからか、先生は首をすくめて苦笑いした。

「だ、大丈夫です。払います。みーこのためですから」

「わかりました。では、これね、承諾書にサインしてください」

困った、十万円払ったら私の貯金通帳はすつからかんのすつてんでんだ。それでも私はみーこを守らねばなるまい。家族なのだから当然のことだ。承諾書にサインをし、先生と手術の日程を立てる。先生は、一番早い日で二週間後のこの日になりますと、壁にかかった猫のカレンダーに赤丸をした。よかった、ついてるついてる。私もその日は夕方から空いていた。

「では、病院が閉まった夕方五時頃から始めましょう」

「わかりました。よろしくお願いします」

また電車で揺られながら私達は家に帰った。

昼からは編集作業が入っている。みーこに水と夕飯を用意すると、私は駅へ走った。選挙カーに乗ったウグイス嬢たちが、「お願いします」を連呼しながらこちらに手を振ってくる。お願いしたいのはこっちの方だ。来月の家賃と手術のことを考えると頭が痛かった。

親に金を無心する歳でもないし、深夜のコンビニのバイトを増やすべきだろうか。師匠に頭を下げて借りるしかないか。

映画監督を目指し上京して早八年がたとうとしているが、短編を数本撮っただけでまだ何の評価も得られてなかった。「君には光るものを感じる。映画祭でそろそろ小さい賞を取ってもおかしくないんだけどね」と師匠は言うけれど、数年前から同じことを言っている気がする。そういう師匠だって最近では招待さえされないじゃないか。おまけに最近の映画を撮らなくなってしまって、ミュージックビデオやCM撮影の仕事がときたま入るくらいだった。「そろそろこっちに戻ってきなさい」と父は正月のたびに心配した。無理もない。男手一つで私を育ててくれた人だ。そろそろ身の振り方を考えねばならないだろう。今日は師匠の知り合いの映像作家から依頼された映像を編集する。金沢の呉服店の宣伝動画らしかった。三十時間だ。三分半の本編のためによくもまあ撮ってくれたもんだ。隣と一緒に映像を見つめる師匠は最近だんだんとお腹が出てきて、作家としての牙もなくなってきた。こんなおやじと私は付き合っていた時期があったなんて血迷っていたとしか言いようがない。あの頃は映画監督という肩書だけで、まあまあかっこよく見えていたのだろう。浮気されて別れた途端にただのおじさんになってしまった。遅めの昼ご飯にパンの耳と豆腐を食べながら、私は切り出してみる。

「師匠、あのですね、みーこが虫歯になってしまいました」

「へー。虫歯」

弁当をほとんど噛まずに飲み込みながら師匠は気のない返事をする。

「それで、手術をして抜くことになったんですね」

「かわいそうだねーそれ」

モニターでは金沢の小道をしゃなりしゃなりと芸妓さんが歩く映像がエンドレスで流れていく。

「そのー、治療費がですね、十万円かかるんですね」

「うわあ、すごい」

「その、できたら、半分払ってもらったり。もしくは貸してもらったりっていうのは……」

「やっべ、打ち合わせ入ってたの忘れてたなあ。じゃあ、あと編集お願いねー」

師匠はのり弁をかき込むと、逃げるように出ていった。いつも逃げ方が下手くそだった。付き合い始めてすぐに私の家に転がり込んできた師匠は「俺の命よりも大事な猫だ」と言ってみーこを連れてきた。ページュ色のふわふわした毛を揺らしながら、みーこは私の部屋を注意深く観察し、やがてこたつの隅っこにもぐってあどけない表情で眠った。私は一瞬で恋に落ちた。出産後の女性のように、男のことなどもうどうでもよくなっていた。

二週間もすると、師匠は他の女の家に入り浸るようになり、みーこと私を捨てた。正確には私とみーこが師匠を捨てた。

「昔の男の猫よく飼ってられるね。思い出さないの？」とか言われるけど、思い出すのも、今だって何食わぬ顔で一緒に仕事しているもの。私は変なところで図太いらしいが、もし逆にみーこを連れて出ていかれていたら、発狂して「みーこを返せ」と女の家を殴り込みに入ったに違いない。だからやっぱり私はついているのだ。

手術当日、ミュージックビデオの撮影は長引いていた。「夕方の五時には来てね」と言われていたのに、スタジオの時計の針は三時半を指している。女優の衣装がイマイチしくりこないのだという。私はそわそわし始めていた。ピンクでも赤でもいいから早くしてくれ。

四時を過ぎたところで、お腹が痛いと言いトイレに行くふりをした。廊下のテーブルに置いていたくたびれたリュックを背負うと、私の足は理性を無視して一目散に駅に向かって駆けだしていた。尻のポケットで携帯が鳴っている。知ったことか。電車を降りて走って走って、汗だくで家の玄関を開けると、全てを察知したかのようにみーこがすり寄ってきた。

「みーちゃん、ごめんね遅くなって。さあ行こうか」

籠にみーこを入れると表通りに出る。私はもう駅へ走らなかつた。右手を高々と上げる。みーこと同じ色をしたタクシーが目の前で停まつた。

「川島動物医院までお願いします」

運転手は勢いよく車を発進させた。ちょうど夕焼け小焼けのメロディーが街の喧騒を包み込み、どつと汗が吹き出した。この時間帯はいつも激混みの環八通りを、タクシーは順調に滑っていく。良かった、私達ついてるよみーちゃん。

「このラーメン屋を左に」

と言うか言わないかの瞬間だつた。

ズドーン!!

私は、運転席に思いきり頭をぶつけていた。シートベルトをしていなかったことを後悔した。みーこは？ みーこ、みーこ。良かった、私の膝に載せた籠は何事もなく無事だ。どうやら玉突き事故らしい。外に出ると後続の車のライトが粉々になっている。そんなことより病院だ。私は全然平気。血とか出てない、腕も足も首も動く。ひたすら謝る運転手にかまっている暇はないのだ。病院へ行かなければ。今後のためにと運転手と名刺を交換し、籠を抱えて私は病院まで走つた。扉を開けると、先生が心配そうに待っていた。みーこを籠から出すと、興奮気味に走り回っている。事情を話すと、厳しい表情で先生は言っ

た。

「今日はやめといた方がいい。みーちゃんも興奮気味だし、それにあなた本当に大丈夫？ 首とか痛くないの？」

「私は全然、この通り」

腕と足をぐるぐると回す。首も。——あれ？ 首が、首が痛い。さっきは平気だったのに、首が、首が曲がらない。そういえば頭もずきずきしてきている。

「先生、痛いです。首が痛いです」

「ほーらー。ここじゃ見てあげられないから人間の病院へまず行こう。むち打ちって放っておくと後で怖いんだよ。抜歯は改めてにしましょう」

「は、はい」

私は人間の病院で全治一カ月のむち打ちと診断された。みーこは私の固定された白い首を見ると悲しそうに泣いて膝の上に乗ってきた。幸いみーこに怪我がなかったのが何よりだった。ただ口の臭さは、まったくもって可愛くないレベルに達していた。

数日後、突然電話がかかってきた。

「この度は本当に大変でしたね」

と保険会社の女性は恭しく労ったあと、「それですわね」と声色を変えた。

「今回、治療費以外にも慰謝料というのが出まして」

「はあ」

「それがですね、十万円ほどになる見込みなんです」

「え！　じゅうまんえん！」

私はガンダムみたいな首のまま小躍りしていた。みーこは美しい毛を風になびかせながら、にゃーんと一声ささやき、私の顔を見てにんまりと微笑んだ。